

連載：魂の中小企業

（魂の中小企業）反逆、どん底、再生、そしてATSUSHIとの出会い（友情編）

2016年2月9日22時00分



川崎和雅さんとATSUSHIさん。ATSUSHIさんのソロライブツアーに同行したときの一枚という＝2014年5月撮影、川崎さん提供



まずは、前回までのおさらいから参りましょう。

東京・南青山にオフィスを構える「アルティス」。化粧品や美容液、健康食品の企画、開発、そして販売をしています。

社長の川崎和雅さん（47）は、中学生のときに「美」に目ざめ、化粧をして通学していました。異質な存在ですので、不良たちからボコボコにされました。

ファッションの専門学校を卒業。洋服店の店員を1週間でやめ、自動車販売店につとめ、みずからも車の販売店を開業します。

ですが、その筋の人たちに目をつけられて脅されます。さらに、体調を崩して倒れると、医者に死を覚悟しろと宣告されます。そのとき、とある健康食品にめぐりあ

い、いまの会社をつくります。

いったん死を覚悟したのですから、生きていることに感謝するようになりました。手をつかって顔や身体にたまった老廃物を流す施術をはじめました。

お金は取らないボランティアです。「ありがとう」と言われることがうれしくて仕方がないのです。

施術を受ける人は、高齢者から赤ちゃんまで。日本だけでなく世界中のセレブと呼ばれる人たちも、たくさんいます。

川崎さんは毎年、大みそかに東京ディズニーランドで上がるカウントダウンの花火をながめ、気持ちを新たにします。

ですが、カウントダウン花火を見る前に、必ずする仕事があります。それが毎年の仕事納めです。

それは夕方にします。紅白歌合戦がはじまる直前です。

EXILEのATSUSHIさんに施術をして、紅白のステージに送り出すことなのです。

お待たせいたしました。川崎さんとATSUSHIさんとの友情編を始めましょう。整形の疑惑がでるほど進化した「ATSUSHI」の謎を解き明かす物語、でもあります。

ふたりの出会いは、いまから6年あまり前にさかのぼります。



2009年、とある日のことだった。

東京都内の飲食店でバイトをしていた若者から電話があった。若者の親が川崎の施術を受けていた。そして、若者がバイトをしている店は、EXILEの事務所が営んでいた。

「川崎さん、EXILEのATSUSHIさんって知ってますか？」

EXILEという名前だけは聞いたことがあった。でも、見たこともないし、曲を聴いたこともない。

「だれ、その人？」

パソコンで検索してみた。

〈EXILEって、いかつそうなグループだ。ATSUSHIという人は、そのボーカルなんだ。いやだなあ〉

「ATSUSHIさんが会いたいと言っています」

そのバイトの若者は、川崎とATSUSHIが会うという夢を見たというのだ。

「ぼくは会いたくない」

川崎は断った。

その話を会社でしたら、ある女性スタッフが口を開いた。

「社長、あなた、何をやってるんですか？」

「どうしたの、なぜ怒っているの？」

「社長、わたしはEXILEのファンクラブに入っています。ATSUSHIさんの誘いを断るなんて、なんてことをするんですか！」

おかんむりである。気まずい。

「わかった、会うことにするよ」

でも、EXILEって、そんなにすごいのか？ そもそもATSUSHIって、だれ？

そのころのATSUSHI。のどにできたポリープをとる手術をしたことをきっかけに、「健康」を意識するようになっていた。ただ、「美」には興味があまりなかった。それはそうだろう、ほとんど丸刈りだったもの。



2009年9月19日。川崎はATSUSHIと初めて会った。場所は、そのころ川崎がセレブのために施術をしていた東京都内の高級ホテルの一室である。

ATSUSHIは、丸刈りにサングラス、日焼けもしていた。きっと不良っぽさを売りにしているのだろう。

川崎の脳裏に一瞬、中学生のころのイヤな思い出がよぎった。化粧をして学校に通っていた川崎は、不良たちに袋だたきにされたことを思い出したのだ。

ところが、である。ATSUSHIの一言で変わった。

「川崎さん、EXILEの曲を聞いたことはありますか？」

なんともやさしく、礼儀正しいのである。

〈うそでも「聞いたことあります」というべきなのだろうか。いや、違う。その場しのぎの取り繕いは、かえって失礼だ〉

川崎は正直にこたえた。

「ごめんなさい。ぼくはいつもZIGGYを聞いている。EXILEは聞いたことがないんだ」

Z I G G Yとは、日本のロックバンドである。

〈まずかったかなあ……〉

ところが、ATSUSHIは、ほほえんで言う。

「では、ぼくが目指している一つの方向を示す曲を録音したCDをさしあげますので、それを聞いてみてください」

なんてステキな男なんだ、と思った。ふつうなら、イヤな顔をされてもおかしくない。

ATSUSHIがつづける。

「ぼくはハワイで、英語で歌ったことがあります。でも、ハワイの子どもたちに、ぼくの心は伝わりませんでした。ぼくは、自分の思いを子どもたちに届けたい」

「ぼくは日本人です。日本語で魂をこめて歌うことが、言葉が通じない国の子どもたちにも伝わることになるのでは、と思うんです」

さらにATSUSHIは、つづけた。

2カ月後の09年11月に、天皇陛下の即位20周年のイベントを控えている。そこで、自分はサングラスをとって歌います、と。

そして、ATSUSHIはサングラスをとった。ATSUSHIの思いが、川崎の心に響いた。

「ATSUSHIくん、わかった。ぼくが心をこめて君に施術をしていく。目の大きさも変わる、そして、ATSUSHIの目ってあんなにきれいだったんだ、と言わせてみせるよ」

ここで確認しておく。川崎は、手の技でからだにたまっている老廃物を流し、顔や体形を変える施術をするのである。見た目には、ただ手を滑らせているだけのようにもみえる技は、カワサキウェーとも呼ばれる。

川崎は医者ではないので、手術はしない、いやできないのである。

ただし、と川崎はATSUSHIにつづけた。

「これから施術をつづけていくと、顔、そして身体のバランスも美少年みたいになっていくと思う。もし、EXILEとして今の雰囲気を守りつづけたいのなら、しない方がいいかもしれない。どうする？」

ATSUSHIは即答だった。「ぜひ、よろしくお願いします」



数日後、ATSUSHIから送られてきたCDを、CDコンポに入れた。EXILEのメンバーだから派手な曲なんだろうな。

スピーカーから、だれもが知っている歌が聞こえてきた。

♪うさぎ追いし かの山

小鮒釣りし かの川

夢は今も巡りて

忘れがたき故郷

唱歌「故郷（ふるさと）」だった。

そして、ATSUSHIが作詞作曲した「道しるべ」という曲も。しずかだけれど、力強い歌だった。

♪人は誰も痛みを抱えて歩く

川崎はATSUSHIの思いを感じた。

〈ATSUSHIくんの優しい心を、世界に伝えたい〉

そう決意した川崎は、ATSUSHIにいった。

「ぼくは、ATSUSHIくんが世界に旅立つお手伝いをします。まずは、天皇陛下即位20周年のとき、サングラスを外したATSUSHIくんがステキにその大役を果たせるよう、できるかぎりのことを僕はします」

こうして、川崎とATSUSHIの友情がはじまる。二人三脚で、「ATSUSHI」というアーティストの進化に取り組んでいくことになる。

ところが、川崎の心と体は、悲鳴をあげていたのだった。



川崎は日本、そして世界の人たちに、十数年にわたり、休むことなく施術してきた。施術は無料。「ありがとう」の言葉が聞きたくて続けてきたボランティアである。

それも、限界に近づいていたのである。ATSUSHI と初めて会ってまもなく、ニューヨークで施術をしていると疲れ切ってしまい、肉体的にも精神的にもぎりぎりに追い込まれた。

日本に帰国すると、日に日に弱っていく自分を感じた。

〈死ぬかもしれない〉

〈いや、いまは死ねないんだ。ATSUSHI くんとの天皇陛下即位20周年の約束だけは何が何でも守らなくては〉

即位のイベント当日までの4日間、川崎は、思いをこめて施術をした。

そして、11月12日の本番。川崎はATSUSHIの施術をし、行ってらっしゃいと送り出した。ただただ約束を守りたいと思っていたので、そのときは身体のきつさを忘れていた。

そして、テレビで、天皇・皇后両陛下の前でサングラスをはずして歌うATSUSHIを見た。

その瞬間、生きていくための何かが身体から抜けたのだろうか、動けなくなった。



極度の食欲不振。からだの中から何か音がする。

〈もしかしたら、これって血が血管の中を流れる音なのか？〉

身体が冷たくなっていく。目の前に、真っ暗な闇が広がっていく。身体感覚がない。お迎えが近づいているのだろうか。

そんな日々が2カ月続く。そして、食事も睡眠も一切できなくなった。もうだめかもしれない……。

無意識のうちに、ATSUSHIにメールを送っていた。

「ATSUSHIくん、うちの会社をよろしくお願いします」

川崎にとって、ATSUSHIは信頼できる大切な人になっていたのである。

川崎はベッドで目をつぶった。そんなとき、右手に何か当たるのを感じた。

〈何だろう？〉

目をあけると、飼い猫が川崎の右手に頭をすりすりしていた。

それまで、この猫は、一度も川崎になつかなかつた。なのに、甘えにきてくれた。

〈ありがとう。でも、お前のご主人さまは、もうだめかもしれない〉

その瞬間、なぜか起き上がることができた。そして、救急車を呼び、近くの病院に緊急搬送された。

〈今日死ななかつた。だったら、大丈夫だ。生きたい、生きたい、生きるんだ〉

入院したら死んでしまう気がして、川崎は自宅に帰った。そして唯一、動く右手を使い、多くの人たちにしてきた施術を朝から晩まで、自分の体中にした。

〈生きるんだ。世界と一緒に、というATSUSHIくんと約束を守るんだ。多くのみなさんの「ありがとう」の言葉を聞くんだ〉

1カ月半後、自分で歩いて外に出られるようになった。連絡できなかったATSUSHIに、おわびと事情を話した。その時、ATSUSHIが言った。

「もし、大切な人がいなくなったら、と思って作った歌があるんです」

「空の彼方（かなた）へ」という曲だった。歌詞カードを見た。

♪君と出逢えて本当によかった

川崎の目からは涙、そして言った。

「ぼくは元気になることを人生の目標にする。いままでみたいにかくさんの方に施術をすることは不可能かもしれない。でも、ATSUSHIくんただ1人のためだけなら、自分に残された少ない力を注ぐことができると思うんだ」

その夏、EXILEのスタジアムツアーが始まった。川崎はそれに同行し、ATSUSHIへの施術を続けた。

宮城から始まったツアーは、20公演以上続いた。愛知の豊田スタジアムでフィナーレを迎えた。以前の不良っぽいATSUSHIは、そこにいなかった。川崎は思った。

〈デビッド・ベッカムのような、王子様のような。生きながらえて、ATSUSHIくんを磨けて良かった〉

その数カ月後には、いっしょに香港に行った。ATSUSHIは1万2千人の前で、「願い」という歌を披露した。もちろん、日本語で、である。

大歓声を浴びるATSUSHI。川崎は思った。

〈いっしょに「世界のATSUSHI」をつくる。その、初めの一步が踏めたんだ！〉



ATSUSHIは言う。

「わたしは、川崎先生に出会うまで、『美』を意識したことはありませんでした」

「正直、整形疑惑が持ち上がるぐらい、わたしは変わりました。音楽と美は密接に関係していますが、あえて分けるなら、川崎先生には、美についてのすべてをお任せしています。そして、わたしは音楽を追求しています」

「その結果が、見た目も音楽性も向上し、いまの『ATSUSHI』の存在感になっているのだと思います。でも、ゴールはありません。そして、人間は老化していきます。川崎先生とは、一生のおつきあいをしていきたいと思っています」



川崎は言う。

「ATSUSHIくんの今の姿は、ATSUSHIくん自身が本来持つ心のきれいさ、ATSUSHIくんの思いの強さにスイッチを入れ、いっしょにつくりあげてきた結果です」

いま、川崎は体力も気力も、十分である。これまでに延べ10万人に施術をしてきた。

今日もまた、世界のどこかで施術をしているはずだ。そして、「ありがとう」と言われて照れ笑いしていることだろう。（敬称略）



中島隆（なかじま・たかし） 朝日新聞の中小企業担当編集委員。福岡生まれの千葉育ち。自称、中小企業の応援団長。著書に「魂の中小企業」（朝日新聞出版）、「女性社員にまかせたら、ヒット商品できちゃった」（あさ出版）。就活生向けの朝日学情ナビでコラム「輝く中小企業を探して」を連載中。朝日新聞朝刊で月1回特集している「われら中小企業」のまとめ役。

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.